RIETI シンポジウム
「『成長戦略』に迫る－第三の矢はどこまで飛ばせるのか？」概要

6 月 26 日に開催された標題シンポジウムに参加してきました。

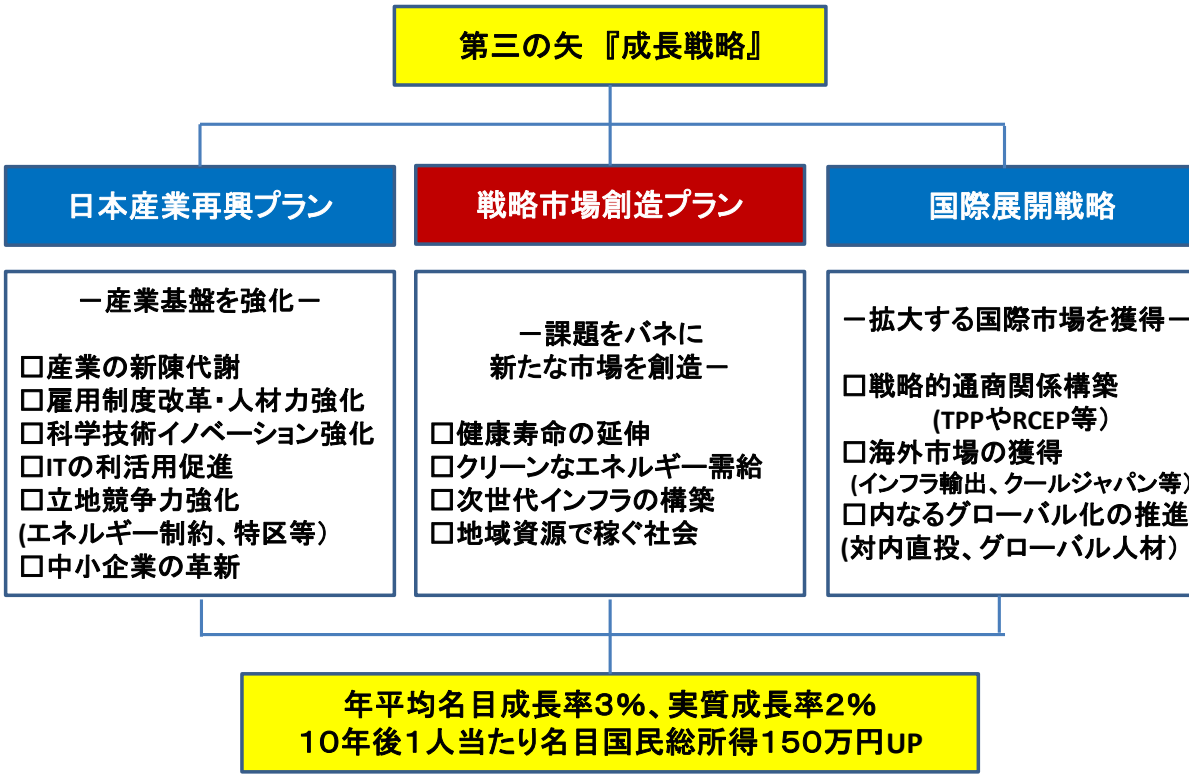
シンポジウム全体を総括すると、「民間企業の活性化、国内投資の拡大、海外市場への展開という戦略の方向性は正しい」が、国際競争に勝つには「スピードと確実な実行が必要だ」ということになります。発表された「成長戦略」は各府省から寄せ集めたウィッシュリストであって、目標達成に至る道筋が不透明であるとの厳しい指摘もありました。

講師の一人、深尾京司一橋大学教授によれば、我が国の潜在成長率の停滞は、1990 年以降の需要不足に加えて、生産年齢人口、全要素生産性(TFP)の停滞と、資本蓄積の減速が日本の経済成長を 3%程度低下させたとのことです。要するに労働力、設備資本、TFP(研究開発等)の全てが生産性向上に寄与しなかったということです。

GDP 実質 2%の成長達成には、例えば TFP で 1.2%上昇、労働投入を 0.5%増やし、資本生産性を 0.6%押し上げが必要となる高い目標だとされました。また、製造業の生産性低下は、大企業、大都市圏、産業集積地の国内工場閉鎖、海外移転の影響が大きく、改善するには大企業の国内回帰と中小企業の研究開発取り組み強化が必要だとのことです。

最早、護送船団の時代ではなく、企業等は自らの判断で舵取りをしなければならないのですが、日本という国が誇らしい国であり続けるために、日本の企業として国内で何をなすべきかを考える必要がありそうです。

図表　成長戦略の３つのプラン



ホームへ